

Title	東京歯科大学千葉病院保存科における平成24年上半期・ 歯内療法処置依頼の紹介症例に関する臨床的検討
Author(s)	加藤， 広之； 末原， 正崇； 藤井， 理絵； 齋藤， 健介； 山 田， 雅司； 間， 奈津子； 浅井， 知宏； 手銭， 親良； 浅野， 紗央里； 三條， 真由美； 村田， 未玲； 森永， 一喜； 石井， 拓男
Journal	歯科学報， 112(4)： 552-552
URL	http://hdl.handle.net/10130/2903
Right	

示 説

No.31：歯科衛生士養成機関学生の臨床実習前後における医療安全に対する意識調査

若林真由美¹⁾、齋藤千晴¹⁾、磯山素子¹⁾、清野菜摘¹⁾、上島文江¹⁾、半田俊之²⁾、久保周平³⁾、古澤成博¹⁾⁴⁾ (東歯大・水病・歯衛)¹⁾ (東歯大・口健・歯麻)²⁾ (東歯大・口健・小児歯)³⁾ (東歯大・口健・総歯)⁴⁾

目的：東京歯科大学水道橋病院では、4校の歯科衛生士養成機関の臨床実習を受け入れている。受け入れ側は、学生の安全確保、医療従事者及び患者を感染事故から守るためにも、学生の医療安全に対する意識と理解度を把握し、臨床実習での教育、指導に繋げていく必要がある。

今回我々は、臨床実習前後に医療安全に関するアンケート調査を行ったので報告する。

方法：調査対象は平成23年9月～24年8月までに東京歯科大学水道橋病院で臨床実習を行った歯科衛生士養成機関の学生132名である。調査は、医療安全に関する項目と大学病院における実習の感想等について臨床実習開始前後に無記名で、選択回答方式と自由回答方式によるアンケートを行った。

成績：1. 医療安全に関する項目について

(1) 「最も重要な医療安全に関する事項」という質問では、実習前後とも感染予防が最も多く、ついで消毒・滅菌の徹底、医薬品・医療機器の管理であった。

(2) 「正しい手洗い方法ができる」と答えた学生が22%、「速乾式擦式手指消毒法を正確に使用できる」と答えた学生は32%、それぞれ実習後に増加した。

(3) 「消毒と滅菌の違いについて説明できる」と答えた学生は、実習後に20%増加した。

(4) 「針・メス以外の注意すべき鋭利な器具は何か」という質問に対し、実習前はスケーラーが43%と最も多かったが、実習後は50%が探針を挙げ、使用頻度が高い器具に対する注意が必要であると認識していた。

(5) 「診療中にグローブを装着した状態で、何かに触れた」と答えた学生は62%であった。

2. 大学病院の感想について

実習前は難症例や珍しい症例が多いと考えていた学生が多かったが、実習後は消毒・滅菌、清潔・不潔の区別について厳しく行われていたと感じていた。

考察：実習前後のアンケートを比較した結果、実習後に消毒・滅菌、清潔・不潔などの感染予防が厳しく行われていたと感じた学生が増加したこと、また危険な器具に対する意識の変化がみられたことは、臨床実習による効果が得られたものと考えられた。また、学生間に理解度に対する格差が認められたことから、今後の教育課題として、知識の習得を目的とした講義等の実施も考える必要があると思われる。

No.32：東京歯科大学千葉病院保存科における平成24年上半期・歯内療法処置依頼の紹介症例に関する臨床的検討

加藤広之¹⁾、末原正崇¹⁾、藤井理絵¹⁾、齋藤健介¹⁾、山田雅司¹⁾、間 奈津子¹⁾、浅井知宏¹⁾、手銭親良¹⁾、浅野紗央里¹⁾、三條真由美¹⁾、村田未玲¹⁾、森永一喜¹⁾、石井拓男¹⁾²⁾ (東歯大・保存)¹⁾ (東歯大・社会歯)²⁾

目的：東京歯科大学千葉病院保存科では、日頃より地域歯科医師会、地域医療施設との医療連携を重視しつつ診療を行っている。各医療機関からの保存科紹介患者では、歯内療法関連症例の比率に高い傾向がみられ、紹介元医療機関での治療効果が得られない難治性の症例も少なくない。今回、今後の医療連携ならびに医療提供の内容と質の向上を目指すために、平成24年上半期(1月～6月)の歯内療法関連の紹介症例の依頼状況を臨床的に検討した。

方法：平成24年1月5日～6月30日に東京歯科大学千葉病院保存科に紹介・来院された患者のうち、歯内療法処置依頼患者を対象とした。担当医が初期診断を行い記載した紹介担当調査票に基づき、紹介症例の性別、年齢、依頼項目、症状、疾患区分、紹介医療機関、提供情報、専門性要否等を検討した。

成績および考察：調査票対象症例数は121例であった。性別は男性32.5%、女性67.5%で、年齢は平均45歳で最少13歳、最高80歳、分布では40歳代(33.3%)と30歳代(21.7%)とで過半数を占めた。依頼項目では「根管治療」76.7%、次いで「歯髄処置」13.3%で、症状では「咀嚼時痛」33.7%、「自発痛」

21.3%、「腫脹(瘻孔)」16.9%が多かった。部位は上顎歯が67.2%と、下顎歯(32.8%)の2倍強で、上顎大臼歯部が38.8%、下顎大臼歯部が18.2%と大臼歯部が半数以上であった。初期診断では「根尖性歯周炎」が77%と最多で、それらの24.7%では人工的穿孔・根尖孔破壊・根管内器具破折といった付帯事項が認められた。紹介医療機関は「開業医院から」が92.5%で大多数を占めた。紹介医の情報提供内容は「適切」46.9%、「やや情報不足」27.2%で、「情報不足」が26.9%であった。治療専門性の要否では「高度の専門性」あるいは「専門性」を要するとしたものが67%、「標準的治療」での対応が可能とするものが33%であった。以上、当院保存科への歯内療法関連の紹介症例には、根管処置上の困難性を伴い、治療技術上の専門性を要するものが多く含まれていた。一方で情報提供不足が約1/4、標準的治療の可能性が高い症例が約1/3含まれていたことから、医療機関向けに根管治療情報記載例や診査・診断要点提示するなど、医療連携・提供の質向上のための具体的方策の検討が必要と考えられた。